

## 母、それはこの世の愛のオリジン

少し昔になるが、東京都中野区で父親の不在中に、母子四人全員が侵入犯に刺殺されるという事件があった。子供は五年生を筆頭に全員男の子であった。私の身近な人間が事件の前年に、この長男のクラス担任であったという事情もあり、今もこの事件を忘れることができない。

賊は物盗りではなく、精神的に異常を来した者であったらしい。

五年生の男の子は、全身を傷つけられながらも、二人の弟を助けようとしたのであろう、電話をとり一一〇番した。「中野区白鷺一の一」そこまで言って彼の声は途切れた。電話中に背中を深く刺され絶命したらしいのである。

事件の報に接して、この男の子の在籍する小学校の校長が駆けつけたが、正面玄関を警察官が警備していて入れない。

校長も冷静さを失っていたのであろう、「馬鹿野郎、わしは校長だ」と警官を押しつけて中に入ろうとした。警備に当たっていた警官はいずれも屈強な者たちだったから、老校長の力で押し入ることができる筈もない。

警官に一人が叫ぶように言った。「そうではないんです校長先生、中にお入りできるような状況ではありません。ご覧になったら先生の命に関わります」。殺害現場は、それほどひどいものだったらしいのである。

素手で立ち向かった母親

母親は全身に数十カ所の傷を負っていた。しかし詳しく調べてみると、その傷はすべて体の前面、特に腕や手のひらに集中していた。背中をはじめ体の後ろ側には一つの傷も認められなかった。不謹慎な表現ではあるが、体の後ろ側はまことに美しいものであったという。

彼女は三人の我が子を守ろうとして、「女ながらも」徹底的に抵抗したのである。咄嗟のこととて「武器」を取るいとまもなかったろうから、彼女は素手で犯人に立ち向かった。

この話を聞いて、「俺がその場に居合わせたら」と思わない男がいるだろうか。父親が居合わせたら、もちろん彼は果敢に抵抗し、賊を圧倒したに違いない。私のような者でも、必ず命がけでこの四人を救出すべく立ち向かったと思う。

だが咄嗟の場合、我々男はこの母親のように捨て身の抵抗に徹することができるだろうか。私はここに母性の偉大さ、もの凄さを痛感せずにはいられない。

「女は弱し、されど母は強し」と言うが、そんな諺など吹っ飛んでしまうほどの母性の凄さを、私はこの事件から感じ取るのである。

子育てに専念する尊さ

そもそも子供は、母の肉体と一体だった者である。その因子を形成したに過ぎない父親とは異なり、母にとり子供は、我が身そのものにほかならない。それゆえにこそ、母性は、こ

れほどに気高く美しいものであろう。

考えてみれば、母親から放射される無際限の愛、報いられることを期待せぬ惜しみなき献身こそは、この世の愛なるものすべてのオリジンなのではあるまいか。

男も人を愛するが、それは幼き日に母から受けた深い愛の残照に過ぎないのかも知れぬ。平塚らいてうは、「元始、女性は太陽であった」を述べたが、女性を太陽をすれば、男はその光を反射して輝く月に過ぎない。まさに母こそは、この世の愛すべての根源だと思ふのである。

女性の社会進出が強調される昨今である。反面「専業主婦」として子育てに専念することの尊さは忘れられやすい。「専業主婦」にも新しい光が当てられねばならぬ。女性の社会進出と家事、育児との関わりはどうあるべきか、このあたりを深く考えてみたいと思う。

(月刊誌「旬なテーマ」平成18年2月号(中経出版発行) 男の生きる道/女の生きる道 掲載)